

新春対談

中国電力

支えあろう

相互扶助の精神とは



やました たかし 1943年(昭和18年)鹿児島県生まれ。66年九州大学工学部卒。中国電力入社。入社後から火力部門を歩んだ後、93年から企画部門を中心に幅広い分野で経験を積んだ。99年取締役・広報部長、01年常務・企画室長、03年副社長。06年の社長就任後は、経営基盤の強化に向けて電源の多様化や効率化の推進、設備・人材面の強化に力を注いだ。11年に中国電力会長および中国経済連合会会長に就任。中国地方の活性化に向けて活躍している。信条は「平常心」。

中国電力会長 中国経済連合会会長

山下 隆 氏



すがなみ しげる 1946年(昭和21年)広島県生まれ。77年岡山大学大学院医学研究科課程修了(博士・公衆衛生学)。81年に菅波内科医院を開業し、在宅介護支援センターやグループホームなどを相次いで開設。学生時代から国際医療ボランティアを始め、84年にAMDA設立。10年に病院経営からは引退し、現在はAMDAグループ代表を務める。95年に日本人で初めて第2回国連プロス・ガーリ賞受賞。このほか吉川英治文化賞、ガンジー人道支援賞、グン平和賞なども受賞している。03年から日本ベンクラブ会員。

国際医療ボランティア AMDA(アムダ)グループ代表

菅波 茂 氏

山下 今日はお忙しいところ、本当にありがとうございます。菅波代表がAMDAを立ち上げられて30年近くになると思います。是非、これまでの活動を通じて得られた様々な考え方を聞きできればと考えております。まず、AMDAを立ち上げられた経緯をお聞きしたいのですが。
菅波 そもそもはAMDA設立前の1972年にタイとミャンマーの国境地帯に、ミャンマーから来たモン族の人たちの開拓農場があつて、そこへ医療チームを送ったのが初めてです。
山下 そのころ菅波代表は、まだ20代です。当時から、いろいろなつながりがあつて、そこへ人を送られたわけですか。
菅波 いやいや。実は1969年に学生運動で岡山大学が閉鎖になりました。それで1人でアジアを10カ月近く回っていたときに、インドで国際医療協力の現場を経験しました。その後、1972年に医療チームを出すという段階で、岡山県倉敷市のある方から「君たちは医師と医学生だったら、私が関係しているバコダ農場というモン族の開拓農場で健康調査をしてくれないか」と言われました。私たちは1回限りだと思っていたら、その後、農場主から手紙が来まして、農民の方が非常に喜んだので、私たちが持つていった医療用器具をもとに、保健委員会を立ち上げて、ヘルスセンターをつくったと。それで、先方から来年も来て欲しいという要望があつて、私たちが毎年行くようになったわけです。
山下 あの当時に1人でアジアを放浪とか旅すること自体がすごい気がしますが、それ以上にそうした医療活動をよく続けられましたね。
菅波 私たちはまず医療チームを組むときに募金をお願いします。数百万円ぐらを集めて行きますが、募金して下さる方は「まさか、君たちの趣味とか道楽で、すぐに止めるわけじゃないですよ」と必ず言われます。それで帰ってきてからお礼に行くと、状況報告をした後に「次はどうするんですか?」「はい、次もやります」と。こういう形でずっと続いていくわけです。
山下 なるほど。
菅波 決定的だったのは、1978年

にカンボジア難民が出たときです。私たちが現地に行きましたが、当時は国連難民高等弁務官(UNHCR)が難民を一元的に管理しているということも分からなかったです。その中で医療行為をしようと思っても国連難民高等弁務官が実績のある医療団体としか組まないということも知らなかったんです。それで善意だけでは何もできないとわかりました。
1枚の写真から
山下 そうなんです。ほとんど手探りの状況から始められたわけでしたか。
菅波 そうなんです。だから、まずは人間関係を構築しようとして、1980年にアジア医学生連絡協議会(AMSA)を立ち上げて、アジア医学生国際会議を開催しました。そして、自分やアジアの仲間たちが医者になったとき、アジアのために医療プロジェクトを行う受け皿として、その4年後の1984年にアジア医師国際会議を開いたんです。この会議は今でも13カ国で続いていますけれども、そのOBたちで同じ年にAMDA設立当時はアジア医師連絡協議会を立ち上げて、現在の活動になったんですね。
山下 しかし、すごい行動力に感服します。昔から国際医療ボランティアを手掛けたいという情熱があつたわけですか。
菅波 そもそもは高校2年生のときに、太平洋戦争の写真集で、同じ年ぐらいの日本兵が南方戦線で半分顔を水に埋めて死んでいる写真を見たんです。そのときに、何で同じ年頃の若者がこんな風に遠く離れたところで、こういう死に方をしなきゃいけないのかと思つたんですね。さらに、なぜ日本はこういう負け方をしたのかと考えたときに、そこには日本人の良い面が出ながらも、決定的なものが欠けているんだなと思ひました。かつて日本には大東亜共栄圏という素晴らしい理念がありました。が、ベトナムのホーチミン国家主席、ミャンマーのアウンサン將軍、インドネシアのスカルノ大統領も最後は全部国旗を翻しました。

20代からアジアを中心とした国際医療ボランティア活動に携わってきたAMDA(アムダ)グループの菅波茂代表。AMDAグループの活動に対する情熱的な語り口からは、自身の経験に基づいた強い信念を感じさせる。対談のホスト役である中国電力の山下隆会長も菅波代表のバイタリティーに感服するとともに、3現主義の大切さや災害時の電気の早期復旧などに対する思いを語った。今回の対談では東日本大震災での菅波代表の経験から、電気が無事に送り届けられることの大切さを改めて確認することになった。



動をされているAMD Aの経済的な背景は一体どうなっているんですか。

菅波 私たちはそんなに多くのお金を使いません。年間予算は約1億5千万円です。私たちのパートナーはアジア各国の医者ですが、アジアでは医者はまだ上の階級です。ノプレス・オブリージュ(位高ければ徳高きを要す)という言葉が生きているんですね。高貴なる義務が。

山下 なるほど。ただ、時代の変化とともに人間もだんだんと自己中心的になっていくのではという気がします。ノプレス・オブリージュという考えはアジアの若いお医者さんにもあるんですか。

菅波 ありますね。だから、AMD Aでは現地支部から日頃の人件費とかの要求はなく、我々は緊急救援の人件費だけを出します。そうすると、数百万円で済みます。ただ、政府がお金を使うときには、それが一ケタ増えます。また、日本の政府が救援活動をするときは日本から薬を持っていきますが、多国籍になったときに日本語は読めないんですね。私たちの活動では現地の医者が薬を持参しますし、それがなければ現地の薬を買います。そのほうが被災地の地域振興にも役に立ちます。

すし、金額も大幅に少なくて済む。だからこそ、募金でやれるわけです。

岡山から世界へ

山下 そういうことですか。そうですね、菅波代表は「西のジュネーブ、東の岡山」という壮大な構想があると伺っております。そうした想いは現在、どこまで実現されたかと考えておられますか。

菅波 1994年に国連難民高等弁務官(UNHCR)がオスロ宣言というのを出したんですよ。国連とインターナショナルNGOはローカルNGOとしつかり手を結ばないと、本当の難民対策にならないという内容です。ジュネーブには人道支援の国連機関、国際機関、欧米のNGOの事務所がありますが、人を助ける理由は人権なんです。一方、ローカルNGOというのは、自分たちの共同体を守っていくという相互扶助なわけです。ただ、人権と相互扶助というのはコンセプトが全く重ならない。国連難民高等弁務官とローカルNGOがしっくりこない一番の理由です。そこで私が思ったのは、日本だったらできるな

せならば、私たちは同和問題などを通して人権教育を受けているし、相互扶助の精神も理解している。日本がジュネーブと組んで、世界の人道支援をやればいいのではと。そして、福祉と医療に感性が高い岡山を世界のローカルNGOのハブにするために、AMD Aが橋渡し役になればいいのではないかと思つたわけです。

山下 AMD Aは国連とのつながりもあるんですね。

菅波 AMD Aは1995年に国連経済社会理事会(UNECOSOC)から特殊協議資格、2006年には総合協議資格を取得しました。これで枠組みがほぼ完成し、国際貢献NGOサミットが10回ほど開催され、世界のローカルNGOのハブに一応なりました。国連の権威があるからこ

援をやりたいということなんです。私も広島県の出身ですが、広島は原爆が落ちたという事実を十分に生かし切っていないんですね。なせ生かし切っていないかというと、被災したという事実は重要ですが、慰霊碑には「私たちは決して忘れない、落とした人を。でも、私たちは許す」と書くべきです。これがグローバルスタンダードなんです。これを書かないから世界の人が理解できないんですよ。

山下 確かに。これまでも慰霊碑の文言をめぐる論争がありましたしね。

菅波 もう一つ大切なことは、毎年、広島市が原爆の慰霊をやる時、アジアで戦争の被害に遭った人たちが、「どうして広島だけ」と思うわけです。人間関係で最悪な見放すという

志があればこそ

山下 菅波代表は医療の活動以外にも、文化的にも造詣が深いし、いろんな活動をされていると聞いています。私は岡山県新庄村の名誉村民なんです。AMD Aも新庄村でアジアのための農業をやっていますよね。

菅波 そうです。新庄村は何が素晴らしいかというと、自分たちが食べる米と市場に出す米が同じという点です。ある意味で、非常に良心的な村なんです。あと、平成の大合併のときに合併せず、自分たちのアイデンティティーを守り抜きました。そして、私たちと話し合つて、新庄村がもともとやっている有機農業、それを加工する第6次産業もアジアに持つていって、貧しい農民や山岳民族により豊かな生活をしてもらおうという趣旨で、アジア有機農業プラットフォーム推進条例を制定したんです。こういう小さな村が大きな志でアジアに影響を及ぼすのに必要なのが法律なんです。私たちNGOが絶対つくれないの

地域との信頼関係が基盤に 公益に資する仕事に誇りを

山下

そ、AMD Aはいろいろな場面で発言ができるようになったし、AMD Aの運営面でも「これだけは守って欲しい」という我々の理念を示すことによつて、優秀な人材が能力を発揮できる環境が整つたわけです。

山下 岡山でAMD Aを立ち上げられた理由というのは。

菅波 岡山県民は歴史的にも誰に動かさなければという慎重な一面があります。それだけに弱者の気持ちがよく分かるというか、弱者が存亡の危機に瀕したときに動くという精神風土があります。それがAMD Aの活動にもびつたりと合致したということですね。

山下 なるほどね。AMD Aの活動はしっかりと根付いていると思います。菅波代表が今後取り組みたいことは何でしょうか。

菅波 私が次に考えたいのは広島と組んで、アジアでの合同慰霊や緊急救

状況が出ているわけです。一番良いのは、広島市が原爆のことを世界に訴え、広島県が第二次世界大戦の被災地に対して、現地の聖職者たちや日本の宗教者らと合同慰霊を現地で行う。そして、広島も世界の人が困ったときに、あなた方を見放さないという意味で緊急救援をやつたらいいですよ。AMD Aは2000年から現地での合同慰霊を行っており、そのモデルはあります。

山下 すでにAMD Aは実践されているわけですね。

菅波 緊急救援でも広島県が持っている財産の一つあります。広島県からの移民です。移民の人たちも見放されたと思っています。すなわち、人間として一番辛いのは見放されているということに加えて、自分たちは必要とされていないということです。これが人間として一番尊厳を失います。広島県の移民の方々は大半が成功している、自分たちを必要としてくれと思つ

が法律です。こうした活動というのは、自分の気持ちだけでは本当の意味で持続可能にはなりません。法律ができて、初めて継続性が確保できます。それを小さな村でもつくれるわけですね。だから、私たちは新庄村と今、組ませてもらっているんですね。

山下 志があれば小さな村からでもいろいろなことができるということですよ。我々も志という意味では、公共の利益に資する仕事ということ、誇りを持って仕事をしているつもりです。中国地方で仕事をしている我々の経営理念として、「エネルギーの持つ可能性を追求します」「お客さまの信頼を喜びとします」「人を大切にすることを大切にします」「地域の発展に貢献します」という5つを創立40周年のときにつくつたんです。それ以来、ずっと実践を重ねてきているつもりですが、今は電力会社を取り巻く環境は非常に厳しいんです。

創立時の謙虚さを忘れずに 電気の大切さを改めて実感

菅波

そうした中で、もう一度原点に立ち返って地元根づくことをしていかなければいけないと思っております。そういう観点で、当社に期待することは何かありますでしょうか。

菅波 やはり一番大切なのは、創立時の謙虚さですね。電気料金を払っている人たちに対する謙虚さや自分たちのやるべき使命感を失ったときに、組織はだんだんと空洞化していきます、大きな事故を起こすんだと思います。もう一つは、電気事業は公の仕事であり、優秀な人材が集まっているという意味で、最悪のときにノブレス・オブリージュが発揮できるかどうかということでしょうか。あと、曾野綾子さんが「電気がなければ民主主義はない」と言っているんですね。民主主義というのは、みんなが同じ情報を持って、ある程度同じ価値観を持つた上に、マジョリティーがマイノリティーを尊敬しながら物事を進めていくことです。その基本である情報の共有を支えているのは、やはり電気です。だから、日本の民主主義の一翼を担っているのが電力会社であり、その責任は重いというぐらいの気概を期待しています。

菅波 それは、今後も是非大切にしていってほしいですね。逆に、私自身が電気を供給される側の気持ちを持ってきたのが、東日本大震災で現地に行ったときです。東日本大震災は阪神・淡路大震災から17年ぐらい経つてますから、現場に入っていく人も阪

むわけです。ノブレス・オブリージュはないかもしれませんが、ライフラインである電気を守るといって社員一人一人の使命感は当社にとって大きな財産のひとつです。

菅波 それは、今後は是非大切にしていってほしいですね。逆に、私自身が電気を供給される側の気持ちを持ってきたのが、東日本大震災で現地に行ったときです。東日本大震災は阪神・淡路大震災から17年ぐらい経つてますから、現場に入っていく人も阪

山下 そういう意味では1991年の原点なんです。台風19号が来て約1週間には約9500人の社員がいますが、そのうちの約8千人は現場で働いています。彼らは台風などの自然災害があつたときに、真っ先に現場に出て行くわけです。

菅波 それは非常に大切なことですよ。

台風19号が原点に

山下 非常に大きな期待です(笑)。当社には約9500人の社員がいますが、そのうちの約8千人は現場で働いています。彼らは台風などの自然災害があつたときに、真っ先に現場に出て行くわけです。



神・淡路大震災の際に参加していない人が多かったんです。私は阪神・淡路大震災の経験があるので、物事がどういふふうに行進していくか、ある程度言えるわけです。電気についても阪神・淡路大震災のときは全部復旧したのは10日後だったという経験で、「今回はかなり被害が大きいのと思うけども、前回の経験から考えれば早く2週間、遅くても3週間で復旧するのではないか」と言えるんですね。

菅波 被災者にしてみれば、あの暗闇の中で寒さに震えて、自分の肉親を亡くした人たちは、将来が見えないことが一番不安なんですね。例えば、あと一週間我慢したら電気が来るといふ見通しがあれば、「明かりもつくし、暖もとれるから、あと一週間我慢しよう」となるわけです。この見通しを説明したことはすごく喜ばれました。ただ、当事者である電力会社の方はなかなか電気がいつ復旧するか明言できないですね。

菅波 被災者にしてみれば、あの暗闇の中で寒さに震えて、自分の肉親を亡くした人たちは、将来が見えないことが一番不安なんですね。例えば、あと一週間我慢したら電気が来るといふ見通しがあれば、「明かりもつくし、暖もとれるから、あと一週間我慢しよう」となるわけです。この見通しを説明したことはすごく喜ばれました。ただ、当事者である電力会社の方はなかなか電気がいつ復旧するか明言できないですね。

災害で問われる我々の真価 社員の使命感が大きな財産

山下

菅波 これは世界で初めて被災地で電気自動車活動した例ではないでしょうか。

菅波 これは世界で初めて被災地で電気自動車活動した例ではないでしょうか。

菅波 これは世界で初めて被災地で電気自動車活動した例ではないでしょうか。

菅波 これは世界で初めて被災地で電気自動車活動した例ではないでしょうか。

菅波 これは世界で初めて被災地で電気自動車活動した例ではないでしょうか。